

公共圏における多声(ポリフォニー)性 —芸術が提供する知の交換

佐々木陽子

本特集は2018年12月に開催されたJSA第22回総合学術研究集会での分科会「公共圏における多声性—芸術が提供する知の交換—」が元である。開催地沖縄は当時、SACO合意で道付けられた米軍再編・日米軍事合同化の途上にあり、辺野古新基地建設問題が緊急課題となっていた。

現在の日本の軍事化は過去の軍事覇権主義への回帰でもあるため、回帰先である侵略戦争への意味付けを変更すべく「歴史修正主義」が跋扈している。その際、国家の歴史と人の歴史が対立し、歴史をふくめ「知は誰のものか」という問いがそこに立ち上がる。

教育者、哲学者のパウロ・フレイレは、ブラジルの貧しい非識字の農民に、生活の意識化として言葉の読み書きを教えるという識字教育を行った。「権力に奉仕するための知」ではなく、自らの社会的状況を発見し、そこに主体的意味付けを行う力としての知を重視した彼の取り組みは後にエンパワメントという言葉を生んだ。本特集が目にする諸実践もこの文脈の先にある。一人一人が自らの形作る社会や物語の意味を発見し、自らの日常と呼応させ、創造へとつなぐための活動に注目している。例えば本特集の陸奥論文は、民衆が継承する歴史・物語が単なる受動的な継承ではなく、あえて声なき声を聞き取り、それと対話さえ行おうとする能動的な継承であることが描かれている。

「公共圏」とは、同質性を基礎とする領域(親密圏)と異なり、「他者」「異質な者」が政治性を持って立ち現れる場である。参加者全員が理性的な熟議をし得る政治主体となり、対話・議

論を行う場でもある。本特集の編集集中に「あいちトリエンナーレ」が開催され、公費で展示すべきものを行政が定め、そうではないものは「私的支出による私的展示へ追いやるべきだ」という公展示制約論が展開された。いわく「少女彫像の展示によって祖父軍人を糾弾する声を感じられる」と。もの言わぬ彫刻作品が、時空間を超え、過去に消された声を可視化した瞬間であった。こうした拮抗が契機になり公共圏が形成されることを考えると、今後も討議の深まりが期待される。

多声/ポリフォニーとは本来、多声音楽やその作曲様式を意味する音楽用語であったが、ロシアの文芸学者ミハイル・バフチンが対話原理を文学に導入し、融合せずに自立した複数の声や意識が織りなす対話的關係によって高度な統一を実現していく構造を分析した『ドストエフスキーの詩学の諸問題』で提唱した芸術思想である。ポリフォニーという概念は現在、様々な文化領域で応用されている。現代的な意義を持つバフチン研究の、しかしながら複雑な内容の概観を、第一人者の桑野先生に解説頂いたことに感謝する。

かつて消された声があり、今なお消されようとする生がある。それらを可視化し、対等な対話関係を可能にする場・公共圏を、芸術に留まらず、史跡、写真記録、科学標本等を利用してどのように作ろうとしているのかを、多様な実践者の寄稿を通し、この特集で感じ取って頂けたら幸いである。

(ささき・ようこ：南山大学，平和学)